

通巻 631 号

紅葉坂

教会だより

2024年4月NO.1
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
荒井牧師

説教

「空の墓」

荒井 仁
マルコによる福音書
16章1節～8節

イースターおめでとうございます。

復活の朝、三人の女性がイエスの体を納めた墓の中に入ると一人の若者が座っていました。彼はまず三人が今ここで何をしているのかを示します。「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜している」。三人がしていることは若者の言うとおりです。十字架で命を奪われて墓に納められたイエスの体に香料を塗るために三人は墓にやつてきました。葬りの習慣の一つである香料を塗っていないので、

それを済ませるためにここにいます。

これに続けて彼は驚くべき出来事を二人に告げます。「あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である」「復活なさって」と訳されていますが、これは「起こされ」と受け身で訳すのが適切です。自分でよみがえった、自分で死から生へと起き上がったのではありません。神によって新たな命が与えられ、神によって起こされました。そして「ここにはおられない」と、墓は空であることを示します。

遺体が墓にない。空の墓がそこにあります。これがよみがえり、復活の出来事の事実です。このあとも若者の言葉は続きますが、女性たちは墓から逃げ去ってしまいます。震えて正気を失つて、誰にも何も言いません

でした。「恐ろしかつたからである」と最後に書かれています。ここにはイエスとの出会いはまだありません。恐怖におののく三人の女性がいるだけです。これが復活が引き起こした出来事の一つでした。

東日本大震災、そして今回の能登半島地震では津波の被害によつて行方不明となつたと思われる方々が何人もおられます。遺体の見つからない家族や友人は気持ちの收めようがなく、やり切れない思いが残ってしまいます。遺体を墓に納めることは、生きている人たちの心の悲しみや痛みを少しでも和らげることがあります。しかし遺体がないことは、何とも切なく区切りをつけるに付けられない状態に人々を置いて行きます。三人の女性たちはイエスの最期を見ていただけに、遺体のない空の墓の現実に直面して、驚きと恐れに囚われてしまいます。

これが最初のイースターの朝に起きた事でした。空の墓があつたというだけのことでした。しかし「空の墓」という現実はイエスの歩みと重なるところがあります。イエスはナザレで家族と暮らしたあと、家を出て宣教の務めを担つて各地を旅

する毎日を過ぎました。自分の家をカファルナウムに持つていたようですが、時々そこに戻つて来てもまたガリラヤ中を巡り歩いて、時には外国人の世界にまで足を延ばしました。行く先々でイエスは人々に救いを与えて氣を癒し悪霊を追い出しました。「人の子には枕する所もない」と言われるほど、移動の日々がイエスの日常でした。一つ所に留まつていないので、多くの人々に神の恵みを届けたイエスの人生を思ふと、イエスのよみがえり、復活は、神がイエスを墓に留めておかずには、新たな世界で恵みを伝えるように、もう一度起こされ、命を与えた出来事と言つことができます。

今日、住み慣れた家を離れ、故郷を迫られる多くの人々がいます。イエスはその一人一人に神の恵みを届けるために、今日も旅を続けておられます。私たちは、そのイエスの働き、神の救いを示し、恵みを届けるために、移動生活を余儀なくされる被災者、難民と恵みを分かち合つていただきたいと願っています。

(2023年3月31日、「どもと大人の合同イースター礼拝説教)